

各関係機関長様

佐賀県農業技術防除センター所長

タマネギべと病の防除対策について

平成29年産タマネギでのべと病の発生を抑えるため、地域ぐるみで防除対策の徹底が必要です。

については、下記の事項を参考とし、防除対策を実施してください。

記

防除対策（表1参照）

1. 秋期（苗床）

苗床の土壌消毒を確実に実施し、育苗期に薬剤防除を行う（図1参照）。

2. 本ぼの準備

可能な限り、これまで本病の発生のないほ圃場を用いる。さらに、暗渠、明渠や高畝による排水対策を行うとともに丁寧に耕起し、時間に余裕をもって準備を行う。

3. 12月～1月頃（定植後）

活着後から定期的に薬剤防除を行う。

4. 1月上旬～3月頃

越年罹病株の発生に注意し、発見した場合は、抜き取って圃場外へ持ち出し処分する。

5. 2月下旬以降

2月下旬（二次伝染直前）から収穫まで、感染防止に重点を置きながら、マンゼブ剤を軸とした10日間隔の防除体系で切れ目のない防除を行う。特に、発生が増加しやすい球肥大初期以降は散布間隔を7日とし、より防除を徹底する（図1参照）。

早生タマネギ等で早期に発生したべと病が、周辺の中晩生タマネギの感染源となる場合があるため、防除対策には地域全体で取り組む。

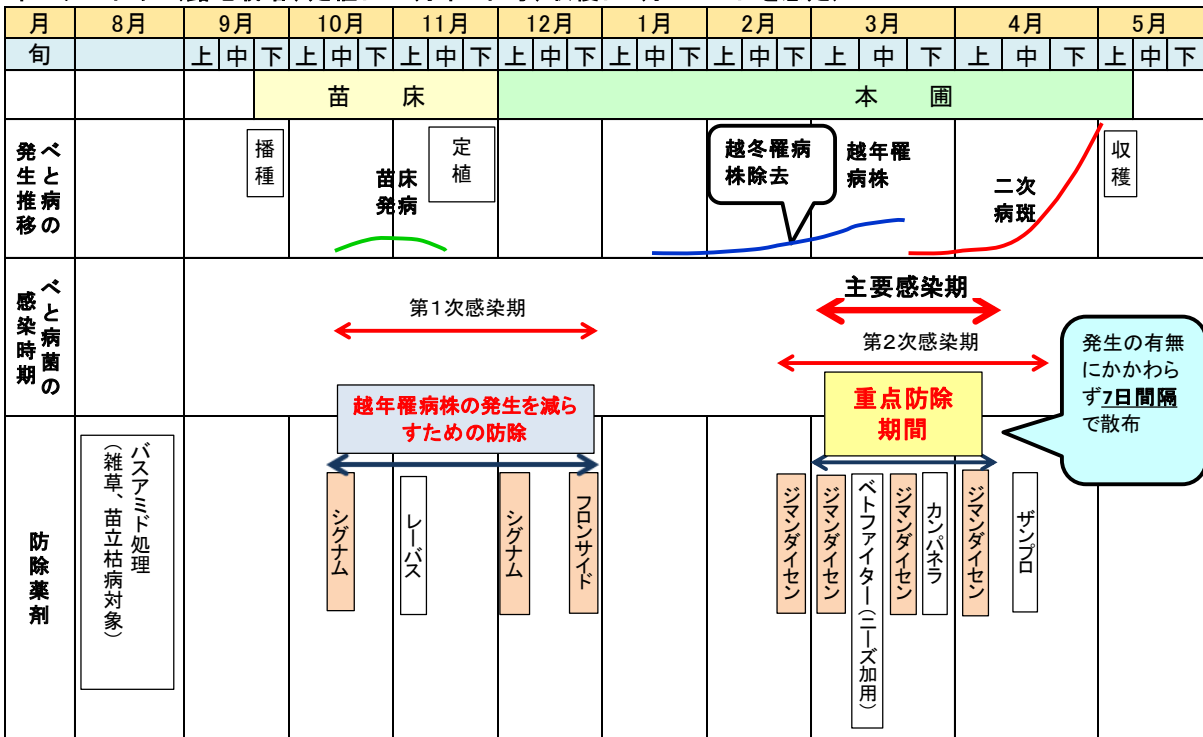
表 1 タマネギベと病の特徴と防除のポイント

時期	感染(肉眼では気づかない)や発病(肉眼で分かる)など	防除対策
秋期 (苗床)	<ul style="list-style-type: none"> ・土の中に生存する菌が、タマネギに伝染する。 ・苗床で発病することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・土壌消毒の実施 ・育苗期の薬剤防除
10月～11月 (本ぼの準備)	<ul style="list-style-type: none"> ・べと病の発生しづらい環境作り 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで発生のない圃場を選択 ・排水対策(明渠、暗渠) ・高畝栽培 ・丁寧な耕起
11月～12月 (定植後)	<ul style="list-style-type: none"> ・土の中に生存する菌が、タマネギに伝染する。 ・低温のために、冬の間感染株が発病することは少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本圃初期の薬剤防除
1月上旬 ～3月頃	<ul style="list-style-type: none"> ・越年罹病株が、1月上旬～3月に連続して発病する。 <p>→症状は、葉が黄化・色あせ、湾曲し、草丈が小さくなる。株全体にピロード状の灰色～灰褐色の分生子を形成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・越年罹病株を早期に発見し、抜き取る。
2月下旬 以降	<ul style="list-style-type: none"> ・3月上旬頃(平均気温10℃以上で降雨が続く時期)から越年罹病株に胞子を形成し、周囲の株に伝染する。 ・3月下旬以降に二次病斑がみられ始める。 ・4月中旬～5月中旬にさらに発生が増加する。 →発生株は、葉に淡黄緑色の楕円形の病斑ができ、やがて枯死する場合もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2月下旬(2次伝染直前)から防除を開始する。 ・引き続き、感染防止に重点を置きながら、マンゼブ剤を軸とした10日間隔の防除体系で切れ目のない防除を行う。 ・発生が増加しやすい球肥大初期以降は散布間隔を7日とし、防除を徹底する。 ・気温15℃前後で曇雨天が続くと多発生しやすいので、このような場合は追加防除を実施する。



図1 タマネギべと病の発生と防除体系(例)

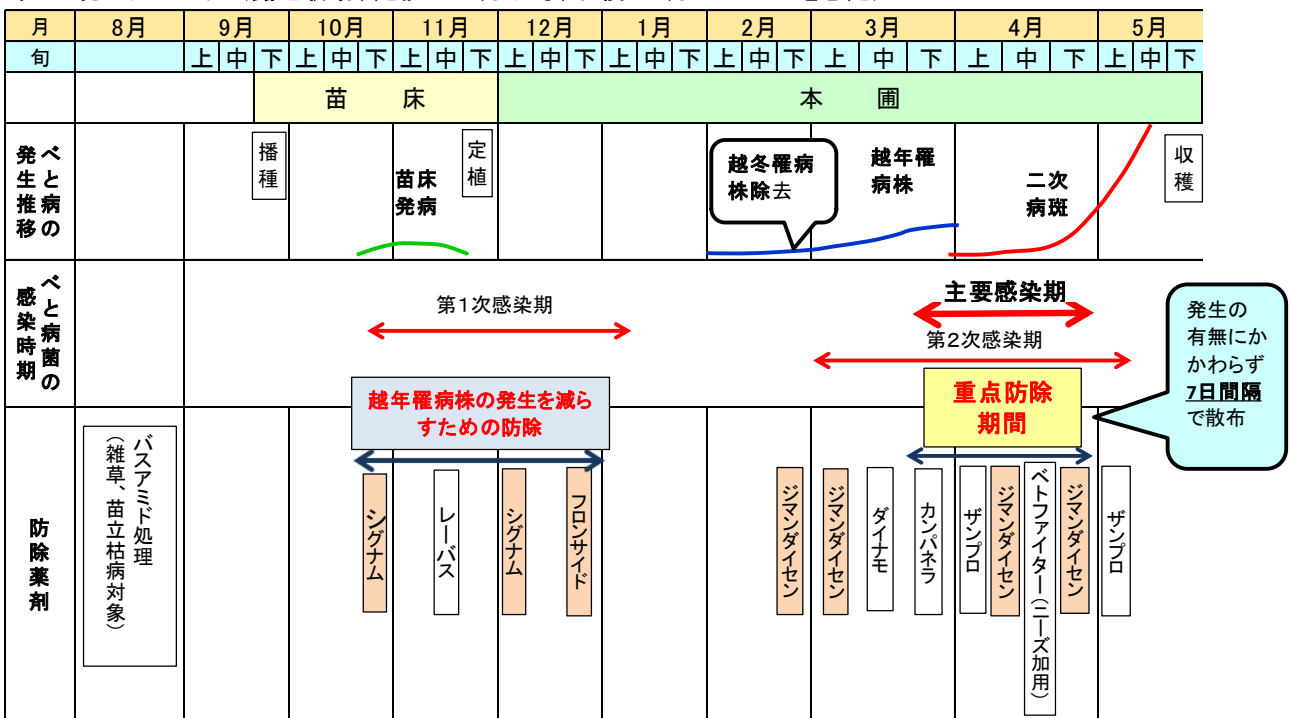
早生タマネギ（露地栽培、定植日11月中・下旬、収穫日5月5～10日を想定）



■ :ポトリチス葉枯症にも登録のある薬剤

※本田での臨機薬剤はレーバス、ホライズン等

中生・晩生タマネギ（露地栽培、定植日11月下旬、収穫日5月22～30日を想定）



■ :ポトリチス葉枯症にも登録のある薬剤

※本田での臨機薬剤はレーバス、ホライズン等

※図1は防除体系例であり、実際の防除については各地区の防除暦等を参考に行う。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-5297 FAX (0952)45-5085